

NHK大河ドラマ2022年度は、三谷幸喜氏脚本による「鎌倉殿の13人」と決まりました。この十三人の中に私たちの地元比企郡と関係する比企一族が含まれています。

そこでこの講座では、主に比企一族について紹介させていただき、最後に「鎌倉殿の13人」についても推測を交えながら触れてゆきます。

## 1、比企一族

比企氏が活躍した鎌倉時代初期を知るための文献は、北条幕府のもとで編纂された「吾妻鏡」(注1)が主要な資料とされています。補足の資料として当時の都の公家の日記や慈円の著わした「愚管抄」、また関連する系図類では埼玉県川島町の金剛寺に伝わる「比企氏系図」さらには武蔵武士浅羽氏が写したと言われる「吉見系図」などがありますが、文献は少なく、謎の多い一族です。

「歴史とは勝者の歴史であり、敗者の歴史は、その土地々の伝承・伝説に残る」といわれます。そこで私達は日本各地に残る比企氏の伝承を集め調査してきました。

注1、鎌倉時代末期(1300年頃)に北条氏の鎌倉幕府によって編纂された歴史書

### ① 武士の誕生

平安時代も中期以降になると各地に武力を持った武士が現れてきます。武士群は大きく分けて次の3つとなります。

・源氏 清和源氏の流れ

新田氏(上野)・足利氏(下野)・佐竹氏(常陸)・武田氏(甲斐)他

・桓武平氏の流れ 平良文を祖 坂東八平氏

秩父氏・上総氏・千葉氏・三浦氏・土肥氏・梶原氏・大庭氏・長尾氏 他

・武蔵七党

横山党・猪俣党・野与党・村山党・児玉党・丹党・西党・(私市党)

国司の末裔や、牧などの管理者の中から中小の同族的武士群が発生します。

その多くは有力武士団との間に封建的主従関係を結んでいました。

### ② 頼朝の誕生

久安3年(1147)、頼朝は清和源氏、源義朝の三男として生まれました。母は熱田神宮の宮司藤原季範すえのりの娘由良御前ゆらごぜんです。

(源頼朝の系図)

義朝

義平よしひら—朝長ともなが—頼朝よしかど—義門まれよし—希義のりより—範頼ぜんじょう—全成ぎえん—義円よしつね—義経よしつね (九郎)

橋本の遊女 波多野義道 由良御前 池田の遊女 常盤御前

又は三浦義明娘 妹

源義朝は、頼朝(幼名鬼武者)の乳母に、家来比企遠宗ひきとうむねの妻を指名しました。頼朝幼年期に乳母は7人いたと言われてはいますが、名前が確認できるのは次の4人です。

比企の尼、寒川の尼、摩々尼、山内の尼  
頼朝の母由良御前は、頼朝が13歳の時に亡くなりました。

### ③ 平治の乱起る

武力を持つ武士はやがて朝廷や摂関家の権力争いに巻き込まれてゆきました。保元の乱に続き、平治元年（1159）平治の乱が起こります。実質的には源義朝と平清盛との戦いです。

この戦が頼朝の初陣でした。しかし父源義朝は平清盛に敗れ、義朝や二人の兄は戦死してしまいました。頼朝も捕まり殺されるところを池いけのぜんに禅尼の助命により、命は助かりますが、翌年14歳の時に伊豆蛭が島へ流されます。

### ④ 伊豆の頼朝

14歳の頼朝が流されたのは伊豆半島の入り口、蛭ヶ島、名前のとおり狩野川の氾濫原でした。流人である頼朝の監視役は、伊豆の豪族北条ほうじょうときまさ時政や伊東いとうすけちか祐親です。

伊豆の伝承によると、頼朝が流された平治2年（1160）から7年ほどは、村人達は平家を恐れ誰も頼朝には近づかなかったと言います。

#### 吾妻鏡壽永元年（1182）10月17日の条

能員の義母（比企の尼）が、武衛（頼朝公）が生まれた頃に乳母だった。そして永暦元年（1160）武衛が伊豆へ流罪になった時に、忠節を存じて、武蔵国比企郡うけしよを請所として、夫掃部允に連れ添って下向し、治承4年（1180）の秋まで二十年間、何かとお世話を申し上げた。

#### 物心両面で頼朝の世話をする比企一族

頼朝が流されると、比企一族も比企の地へ移りますが、比企遠宗は平治の乱の傷がもとで比企の地で、早くに亡くなったようです。

頼朝の伊豆での生活は20年、その間、比企の尼は、比企家の総力を挙げて頼朝の支援を続けてゆきました。伊豆の伝承では、支援の荷物は、比企から月に一度届いたと言います。

比企の地から送られた生活物資は、次の物と推測されます。

- ・米などの穀物
- ・衣類
- ・紙

比企氏の館は、どこにあったのか定かではありませんが、伝承では次の場所があります。

- ・大谷
- ・古郡
- ・岩殿地域
- ・川島金剛寺
- ・滑川和泉

頼朝が乱を起こすことを恐れた平家の見張りは厳しく、比企の尼は平家の目をごまかすため、頼朝に「昼は父や母・亡き源氏一門の供養のため読経や写経の生活を続けなさい。」

そして頼朝が大きくなると「夜は女遊びをするよう」に命じたと言います。頼朝の流人生活も後半になると、平家の監視も緩み、比較的自由に伊豆の中を動けるようになりました。

伊豆の伝承では、

比企一族も、現静岡県函南町の高源寺の近くの大竹に屋敷を構え、ここで生活していたと言います。また比企の尼は、平家打倒のため、伊豆に流人となった文覚上人と頼朝を会わせ、函南の高源寺こうげんじに於いて平家打倒の相談をさせたと言われます。

そして頼朝、31歳の時に北条時政の長女政子と出会い、21歳の北条政子と結婚します。

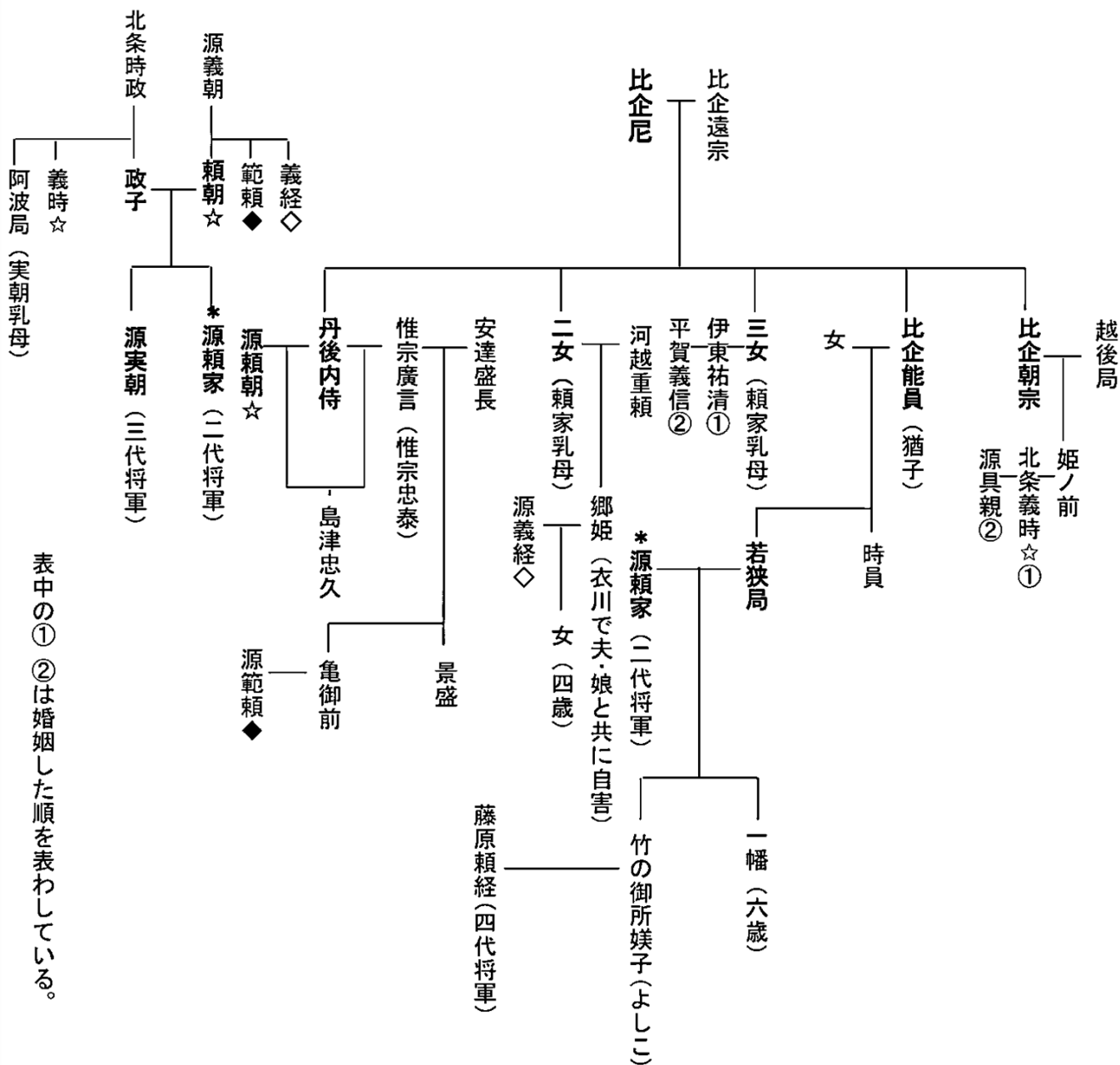
⑤ 頼朝の旗揚げ

治承4年(1180)頼朝のもとへ<sup>もちひとおう</sup>以仁王より平家打倒の令旨が届きます。当初頼朝は旗揚げの意思はなかったようですが、都で、以仁王と源頼政の打倒平家の企てが失敗すると、平家が源氏追討の軍を動かすとの情報が届き、ついに北条氏ら同志を集めて立ち上がり、近くにある伊豆の<sup>もくだい</sup>目代平家山木兼隆の館を襲い、勝利しますが、その後石橋山の合戦で敗れ、安房の国へ逃げました。

安房へ渡った頼朝は、多くの武蔵武士を味方に付け鎌倉に入りました。その時の軍勢は数万人といわれています。

鎌倉は三方を山に囲まれ、前は海で、敵に攻められない堅固な町でした。頼朝は、浜辺に在った<sup>よりよし</sup>源頼義が建立した八幡宮を現在の地に再建し、大蔵幕府、若宮大路など鎌倉の整備に着手してゆきます。

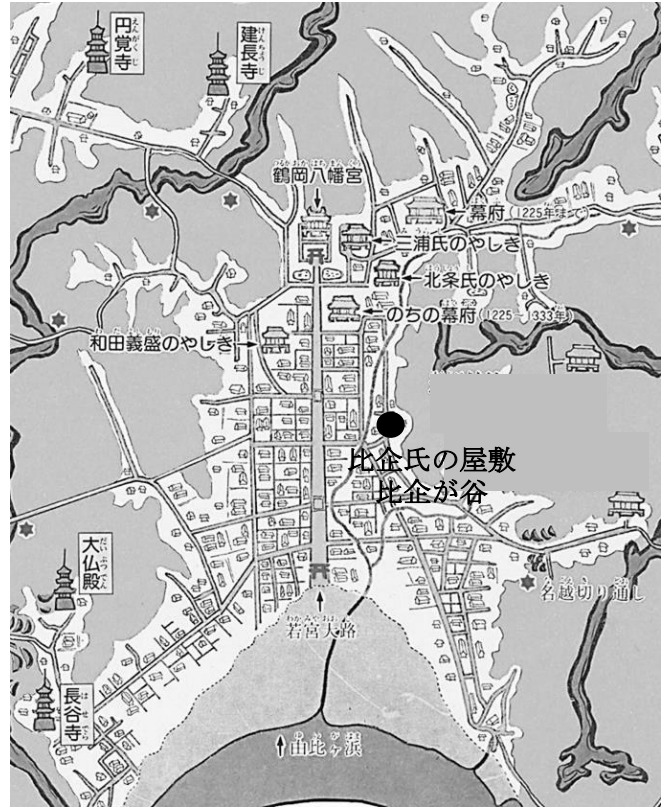
比企氏関係図



## ⑥ 鎌倉での比企氏

頼朝が鎌倉に入ると、20年にわたり頼朝の世話をした比企家も取り立てられ、比企が谷に屋敷を構え、比企氏の繁栄が始まりました。吾妻鏡には比企氏に関して次のような事が記されています。

- 比企能員が奥州攻め下つ道の大將となる。
- 頼朝、後白河法皇よりの任官者10人の中に右衛門尉として比企能員を推挙する。
- 比企能員は信濃、上野の目代となる。
- 長男頼家の産所は比企の屋敷となり、御台所が移る。→実朝の場合は北条の屋敷でした。
- 頼家が生まれると比企の尼の次女河越重頼の妻が乳付を行い、能員が乳母父となる。
- 頼朝と政子、比企屋敷を訪問し、瓜を食し、1日中遊ぶ。
- 重陽節句、頼朝と政子、比企の屋敷を訪ね、1日宴会を催し、帰りに土産を渡す。



## ⑦ 比企氏の悲劇

吾妻鏡では、その部分が欠落していますが、源頼朝は建久10年(1199)に亡くなります。

同2月18歳の嫡男頼家が二代将軍となると、北条時政をリーダーとする御家人グループは、頼家と対立するようになります。同4月には、頼家の訴訟決裁権を廃止して、御家人13人の合議制としてしまいました。これが「鎌倉殿の13人」です。

さらに正治2年(1200)頼家の乳母父であった梶原景時を追放、誅殺します。

この後の北条氏の動きを吾妻鏡から見てみます。

## ⑧ 北条氏の陰謀

- ◆北条氏を代表とする御家人グループは、このままでは頼家と比企一族の若狭局の子一幡が三代将軍になることを恐れ、建仁3年(1203年)頼家が病気になると、長男一幡が継ぐはずの領地を一幡と千幡(実朝)で分割してしまいます。

一幡の所領：関東28国 千幡(実朝)の所領：関西38国

- ◆建仁3年(1203)9月2日、大江広元邸で頼家と比企能員の北条氏打倒の話をしているのを、障子を隔てて政子が聞き、時政に伝える。
- ◆陰謀を知った時政は、比企能員を薬師如来の法要があると偽り自邸に呼び殺してしまう。

◆能員だけでなく比企が谷の比企氏の屋敷にも攻め込み、比企氏一族、一幡も殺してしまう。

## ⑨ 比企の乱の真相は？

以上が吾妻鏡に記された、史上「比企の乱」と呼ばれている事件であり、比企氏の謀反と見られています。

これは真実なのでしょうか？他の文献の記述を見てみますと、

### 1) 藤原定家「明月記」

「9月7日、幕府の使者が上洛「頼家が没し、子の一幡は時政が討った。弟千幡を跡継ぎにするので、許可してほしい」と云ったと記されています。

しかし9月7日に報告するためには、9月1日には鎌倉を立つ必要があります、この時、頼家はまだ生きています。

### 2) 「小代文書」によると、能員が<sup>しょうだい</sup>单身平服で時政邸にやって来たのは確認する事が出来ます。

では何故、能員は平服で時政邸に行ったのでしょうか？

『頼家の家督相続が問題になっている緊迫した状況で、たとえ密事が漏れているのを知らなかったとしても、武人がこんな隙を見せるだろうか？家督相続自体が、北条家のつくりごとではなかったか？』これは東大史料編纂所 本郷和人氏の見解です。

さらに比企の乱は1日だけではなかったようです。

### 3) 比企の乱の時、頼家はどこに居たのでしょうか？

慈円作「愚管抄」によると重病の頼家は大江広元の屋敷に移ったと記しています。吾妻鏡の記述では、大江広元邸に頼家も、能員も、政子も時政も居たことになっています。

こんなことがあるのでしょうか？

### 4) 頼家と能員は、障子越しに、政子に聞こえるような大声で、時政打倒の密事を話したのでしょうか？

### 5) 吾妻鏡では、政子が比企氏の謀反として、幕府として討伐軍を派遣して、比企邸を襲ったと記されていますが、愚管抄によると、時政が手勢を集め、比企邸を襲ったと記しています。

### 6) 吾妻鏡では、一幡は比企邸の小御所で死んだことになっています。しかし愚管抄では、一幡は合戦の前に乳母に抱かれて小御所を出たと記述し、11月に北条義時が<sup>まんねん うまのすけ</sup>郎等万年右馬允に一幡を殺させたと記述しています。

### 7) またいずれの資料でも、女性達の生死については記されていません。

## ⑩ その後の比企一族

### 1) 竹の御所 (源嬬子 (よしこ) または鞠子 (まりこ))

・源頼家と若狭の局の子、四代将軍頼経の妻となり、比企氏を復権させます。墓は鎌倉妙本寺にあります。

### 2) 比企能本 (ひきよしもと)

・文応元年 (1260) 能本は父と母の菩提を弔うため比企の屋敷跡に法華堂を建立し、それを日蓮聖人に寄進し父母の菩提を弔ってくれるよう頼みました。日蓮聖人は能本の父・能員に「長興」、母に「妙本」の法号を授与し、「長興山妙本寺」としたのです。

### 3) 仙覚律師

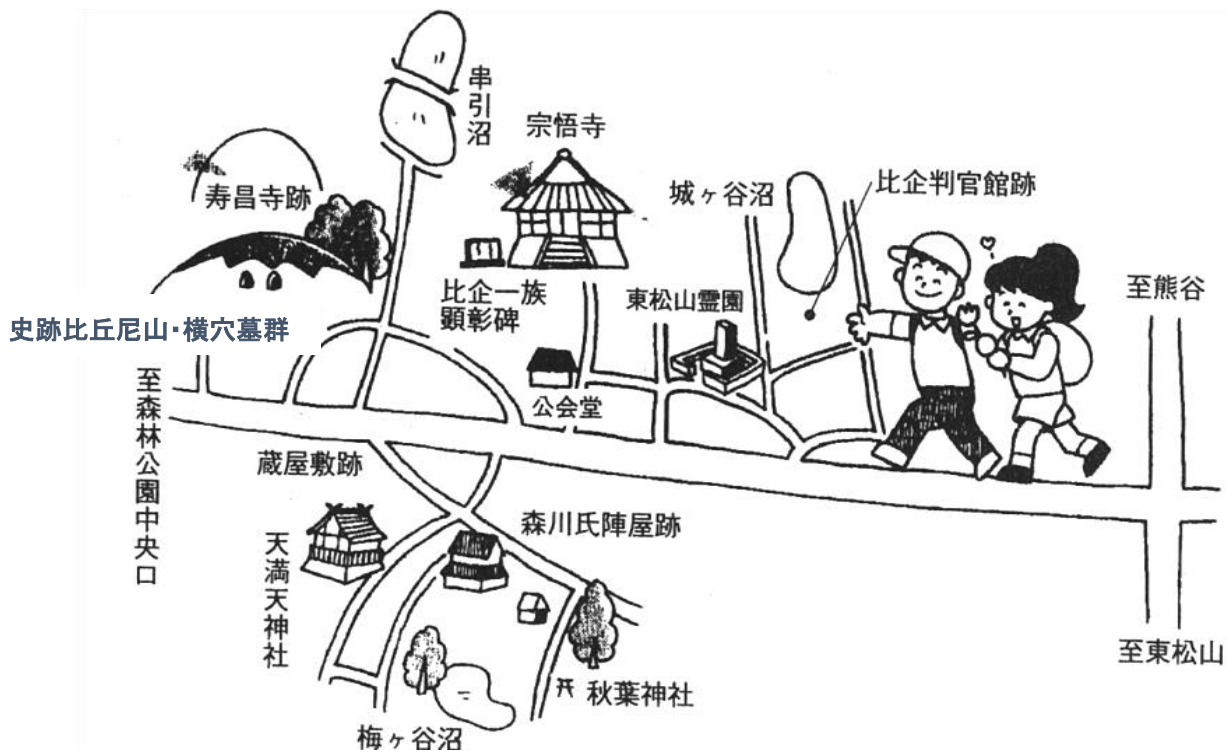
- ・万葉集学者、13歳より万葉集の勉強を始めました。
- ・建長5年（1253）それまで点を加えられていなかった万葉集152首を解説します。
- ・武蔵国比企郡北方麻師宇郷（小川町増尾）にて万葉集注釈を完成させます。

#### 4、比企氏

- ・戦国時代より中山村（現川島町）に在住し、江戸時代中頃より、子孫は代々医者の家系となりました。
- ・川島町金剛寺に、天正時代以降の比企氏の墓があります。

## 2、大岡に残る比企氏の伝承

それでは最後に、大岡地区の比企氏の遺跡伝承を訪ねてみましょう。



せんこくさんそうごじ

### ① 扇谷山宗悟寺（曹洞宗）

北条氏の謀略により夫頼家を殺害された若狭の局は、その遺骨を抱いて比企郡大谷村へ逃れ、大谷村の西方の比丘尼山に庵を結び、村の名と頼家の法号をとって「大谷山寿昌寺」を建立し、夫頼家の霊を吊ったといひます。

寿昌寺は、天正20年、徳川家康の関東転封に伴い、大谷の地を知行した旗本森川氏の菩提寺となりました。森川金右衛門氏俊は、寺を比丘尼山から現在の扇谷に移し、寺の名を「扇谷山宗悟寺」と変えました。

森川金右衛門氏俊の法号は「桐蔭宗悟居士」と云ひます。宗悟寺には、若狭の局が持ち帰ったと伝わる頼家公の位牌を今に伝えており、境内には、地元の有志による比企一族顕彰碑が設置されています。

また寺の背後には森川氏累代の墓も置かれています。なお森川氏の江戸屋敷は本郷にありましたので、昭和40年（1965）まで、そのあたりは森川町と呼ばれていました。現在は文京区本郷となっています。

## ② 比丘尼山と寿昌寺跡

扇谷山宗悟寺の西方約500mの所に、「比丘尼山」と呼ばれる女性的な美しい山があります。その昔、比企遠宗ひきとうむねの妻比企の尼が、夫遠宗亡き後、尼となって草庵を結んだ所と伝えられている場所です。

また、「郡村誌」には、この比丘尼山について、「高一丈周囲八町、村の西にあり、往時源頼家伊豆国修禅寺に於いて薨せし時、若狭の局遺骨を奉し此村に來り、遺骨を葬り庵を結び居住せしにより、庵を修善寺と呼び比丘尼山と呼ぶと口碑に伝う…」とあります。

若狭の局が建立したと伝える「大谷山寿昌寺跡」は、この草庵址に程近い北の小高い丘陵で、その麓に源泉沼と言う沼があります。この辺から南は、今でも主膳寺と呼ばれる地域です。またこの比丘尼山には横穴墓古墳が造られており市指定史跡となっています。

## ③ 城ヶ谷と比企能員館跡

宗悟寺の東、雷電山の真南にある奥深い谷が、いわゆる城ヶ谷で「埼玉県史」や「埼玉の神社誌」には、ここに比企能員の館があったと記しており、口碑もそのように伝えています。

しかし、残念ながら、これまでに館跡は発見されていません。確かに、この地は鎌倉の比企ヶ谷によく似た地形で、中内出と呼ばれる最も早くから開かれた地域にあり、谷の北から東に連なる丘陵には、多くの住居跡とその祠が残り、このあたりは、比企の乱後、若狭の局に従って落ちて来たと伝える頼家の側近の子孫が住みついたと伝わります。

## ④ 梅ヶ谷と若狭の局

宗悟寺の南約400mの所に梅ヶ谷はあります。ここは若狭の局が年老いて隠棲した所と伝えられている所です。この谷は、東方から南西へと丘陵が続き、汲めども尽きない清らかな泉の湧く、暖かい日だまりの地で、昔から梅の古木の多い美しい花園であったと言ひ、夫を失った若狭の局が、比丘尼山の草庵から移り、静かに余生を送るのに絶好の地であったと思われます。

ここは江戸時代はいると、大谷村を知行した森川金右衛門氏俊の陣屋があった場所とも云われています。

## ⑤ 伝説「若狭の局くしびきぬまと串引沼」

宗悟寺の西、比丘尼山に隣接して、東の谷の奥深く、串引沼という大沼があります。

「郡村誌」には、この沼を「奇比企沼」と記しており、次の様な伝説が伝わっています。

『その昔、比丘尼山の草庵に住み、夫頼家の菩提を弔っていた若狭の局は、祖母比企の尼の勧めで、心の迷いを去る為に、鎌倉より持参し肌身離さず持っていた夫頼家からおくられた鎌倉彫の櫛を捨てようと心に誓いました。

夜の明け染めた早朝、朝の勤行を済ませ、祖母の比企の尼と二人連れだつてこの沼に行き、頼家形見の櫛を沼に投げ入れました。櫛はかすかな水音を残して沼底深く沈み、その姿が見えなくなりました。その時若狭の局はもちろん、比企の尼の両眼からも涙がとめどなく流れ落ちていました。

時は元久2年（1205）7月半ば、丁度、夫頼家の命日に当たる日であったと云います。』

## ⑥ 秋葉神社

宗悟寺から道を挟んで南、小高い丘の上に秋葉神社と云い、火伏の神様として信仰を受けている神社があります。江戸時代の領主森川氏は、この神社を江戸本郷の屋敷に分祀し、守り神としていました。ある日、江戸を火の海にし、ことごとく焼き尽くしてしまうような大火事が起こりました。しかし森川氏の屋敷だけは、秋葉神社の神様に守られて、火の難を逃れたそうです。そのため火伏の神として有名になり、この大谷の秋葉神社は、松山の町からもお参りする人が増え、そのお参り道が、今も「秋葉道」として残っています。

この秋葉神社の東の谷を須賀谷すかやつといいます。この谷には比企西国三十三札所の「菅谷観音堂」がありました。この観音堂には「蛇苦止観音」が祀られていました。この観音様は、若狭の局が夫を殺され、その悲しさは蛇に巻き付かれて絞められるようでした。その苦しみから逃れるようにご祈願をした観音様です。この寺は廃寺となり、蛇苦止観音は、今は宗悟寺に祀られています。

## 参考

鎌倉妙本寺に残る蛇苦止明神の伝承（妙本寺ホームページより）

### 蛇苦止堂（じゃくしどう）

蛇苦止堂は比企谷妙本寺の守り神（鎮守）蛇苦止明神（じゃくしみょうじん）を祀るお堂です。比企能員の娘、讃岐局が2代将軍 頼家公の側室となり、一幡（いちまん）之君を授かり、将軍家の外戚関係になった時から北条一族は比企一族を最大のライバルとして敵視し、ついに建仁3年9月2日、党首能員をはじめ、一族郎党は北条家の手にかかって討ち滅ぼされました。讃岐局、一幡之君もこの比企谷の地で火攻めに遭い、讃岐局は池（一説には井戸）に身を投げ、一幡之君もまた六歳の幼さをもって焼死しました。妙本寺の境内にひっそりとたつ五輪の塔は一幡之君の着衣の袖を供養したものと伝えられています（一幡之君袖塚）。そして、この乱より50年ほど後、北条政村の娘が何かを取憑かれて座敷をのたうち回り苦しみ、「北条家に恨みがある。わらわは讃岐局。今は蛇身を受け、比企谷の土中で苦しみを受けている」と語りました。讃岐局の弟



にあたる比企能本は日蓮聖人に救いを求め、日蓮聖人は、讃岐局の怨霊を法華經の功德を以て成  
仏せしめ、蛇苦止明神と名付けて祀りました。それ以来、今も毎月 1 日（正月は 2 日）に例祭を  
つとめ、信徒と共に法華經読誦唱題が続けられています。